

ふしぎな鳥がくる

久保 喬・作
鈴木義治・え



創作子どもの本 7

ふしぎな

鳥がくる

金の星社

ふしぎな鳥がくる

創作子どもの本7

1975年1月／発行©

著者／久保 喬

発行者／斎藤佐次郎

発行所／株式会社金の星社

〒111 東京都台東区小島1丁目4-3
電話／東京03-861-1506(代表)
振替／東京0-64678

印刷・製本／株式会社 ケイ エム エス

乱丁落丁本はおとりかえ致しますので、お求めの書店または本社へお申し出願います。

913 久保 喬

ふしぎな鳥がくる

金の星社 1975

150 P 22cm (創作子どもの本7)

基本カード記載例

8393-041071-1406

はじめに

ビルの上の鳥の空港^{くうこう}

広場にまう白い羽根^{はね}

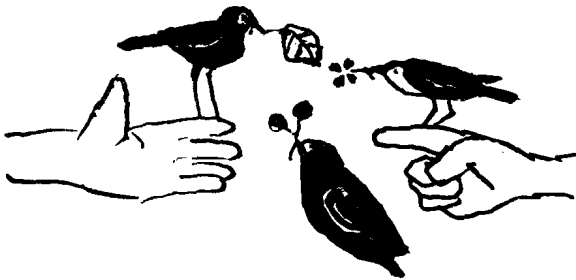
路地^{ろじ}の空の小さなうた

町へきたさまざまの鳥たちが

子どもたちに聞かせてくれた

ふしぎな話や、

おもしろいものがたり――



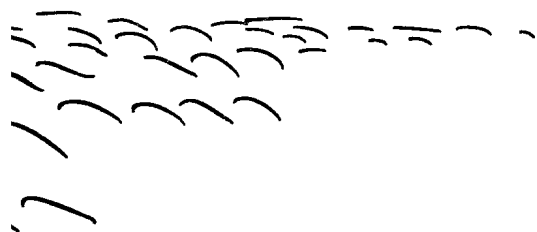
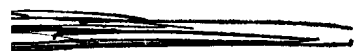
もくじ

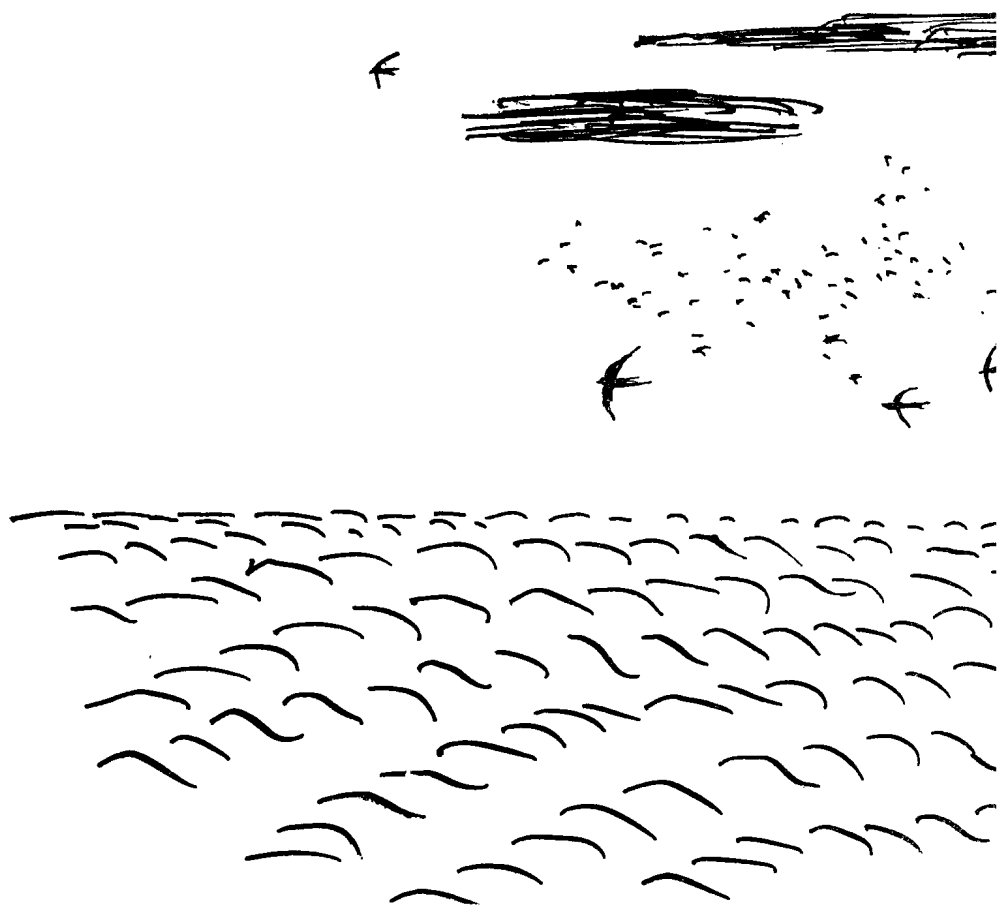
鳥たちの町
(6)

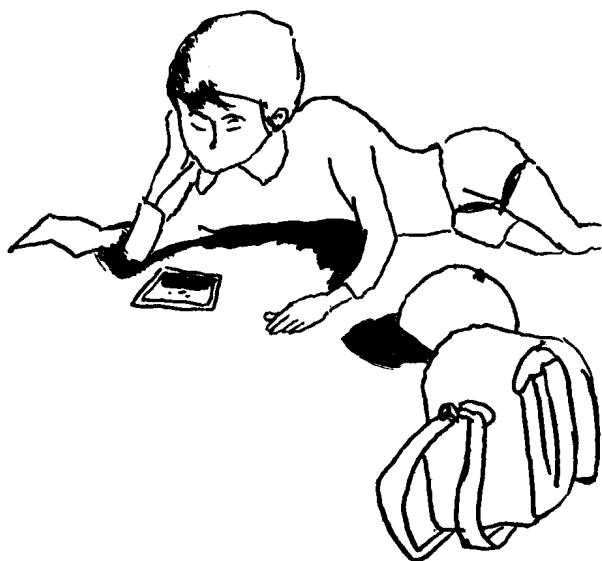
鳥の空港
(45)

鳥の小さなものがたり
(101)

■ あとがき
(150)







作者・画家紹介

久保 喬(くば たかし)

1906年、愛媛県に生まれる。
おもな著書に「かしの木ホテル」「ビルの山ねこ」(小学館文学賞)「海はいつも新しい」「少年の石」「赤い帆の舟」(日本児童文学者協会賞)「火の海の貝」などがある。

現住所一東京都練馬区中村南3-16

鈴木義治(すずき よしはる)

1913年、横浜に生まれる。川端画学校卒業。現在は出版美術の分野で活躍。毎日出版文化賞、小学館絵画賞などを受賞。おもな作品に「ビルの山ねこ」「小さな小さなキツネ」「とうげのおおかみ」などがある。

現住所一横浜市磯子区中原4-24-20

創作 子どもの本 7

ふしぎな鳥がくる

久保 喬



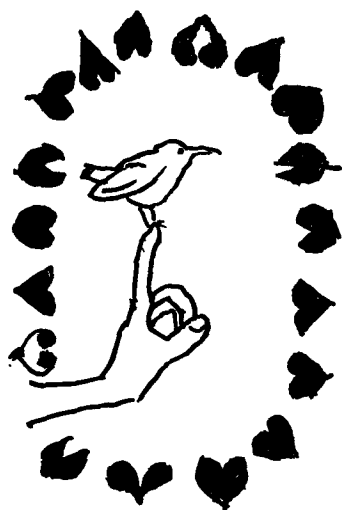
鳥たちの町

1

アキラは、はじめてその子を見たとき、「おや、あいつ、きみよ
うなやつだなあ」と、思った。

町の川の、川原かわらにひとりで立っていて、右手のゆびをくちびるに
あてながら、

ポポー、ポポー、ポポー



と、口笛くちぶえをふいている。

そのうちに、ぱさ、ぱさっと、空から二、三羽ぱの鳥がまいおりてきた。きれいなもようの羽はねをしたキジバトだ。その子のすぐそばの砂地すなじを、のこのこあるきまわっている。

「ふうん、あいつ、鳥をよぶことができるんだな。」

アキラがむちゅうで、その子のまえへちかづいていったので、ハトたちは、ぱつとにげていってしまった。

ふきげんそんな顔をしてふりむいた子へ、

「ねえ、いまの口笛くちぶえ、どうやってふくの。」

と、たずねると、むつつりとへんじもしないでだまっている。頭のかみがぼうぼうとのびていて、色が黒い。このあたりの町の子ではないようだ。

「なあ、おしえてくれよ。」

と、アキラがくりかえしていうと、その子はだまって右手のゆびを二本口にあてて、ポー、ポーと鳴らしてみせた。アキラはすぐまねをしたが、みょうな音がするだけで、その子のような笛^{ふえ}にはならない。

その子は、また鳴らしてみせる。ほんとうに、キジバトの鳴き声にそっくりだ。でも、アキラがいるせいか、ハトはとんでこなかった。

「ほかの鳥でもよべるのかい。」

「鳴きかたをかえればな。シジュウガラ、ズリ、ジョウビタキなんか、このへんにはあまりおらんが、山の村ならいくらでもくる。」

話すうちに、どこか遠いなかからこしてきた子で、川のむこう

岸^{ぎし}にある地下鉄^{ちかてつ}の工事場の飯場^{はんば}に住^すんでいることがわかった。

こうしてアキラは、ケンという名まえのその子と、ときどき出あって、いっしょにあそぶようになった。

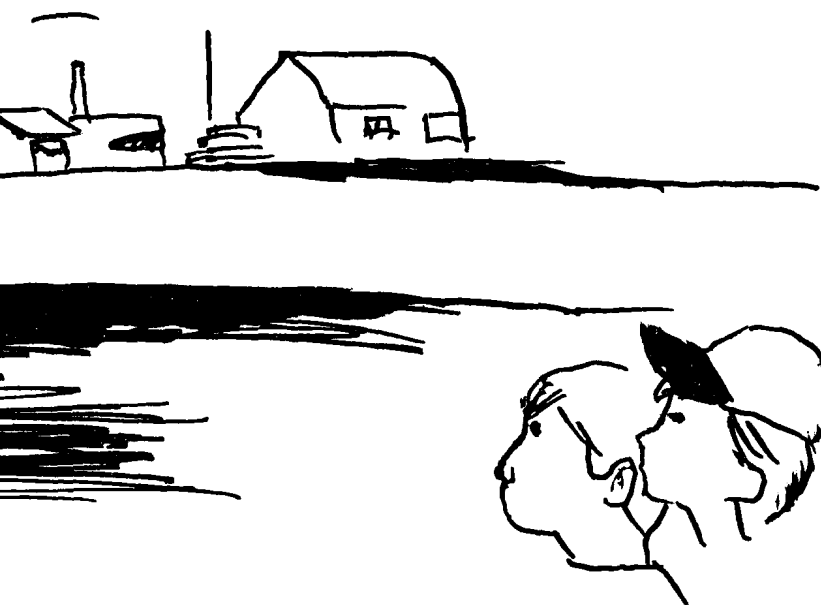
「町にもな、いろんなところに鳥がおるのを知っとるか。」

そういって、ケンは、アキラをひっぱって、町の中をうろうろした。そして、思いがけない場所^{ばしょ}に、鳥たちの巣^すがあるのを、ケンだけが見つけていて、アキラにそっとおしえてくれた。

ネオンサインの広告塔^{こうこくとう}の上にあるツバメの巣^す、高いビルのまどのかげのカラスの巣^す、街路樹^{がいろうじゆ}のヤナギのこずえの巣^すの中に鳴いているキジバトのひな。

「ふうん、町の中なのに、だれも気がつかないのだなあ。」

だが、半日もあるきまわった町の中で、アキラが一ばん、はっと



したのは裏町うらまちを流れているせまい運河うんがのよごれた黒い水の上を、まっ青さおな、きれいな色の羽はねをした鳥が一羽わ、すーっと、とんでいくのを見たときだった。

「ほう、きれいだな。あれ、なんという鳥だろう。」

「あれはな、カワセミ。こんなきたない町の運河にくるなんてめずらしいよ。どうしてやってきたんかなあ。」

と、ケンもくびをかしげる。

「水のすんだ村の川にいる鳥だがー。」

それからケンは、ふと思い出したよ



うに、村にすんでいたときの、きれいな川の魚つりの話もした。

「サクラのちるころになるとな、ハヤなんかの川の魚が、とてもきれいな色のからだにかわるんだよ。黄^きや、青や、みどり、むらさきなんかの、ニジのよな色のからだの魚になる。オスが、メスをよぶためなんだ。」

そんな川へ、アキラもいつてみたくなった。

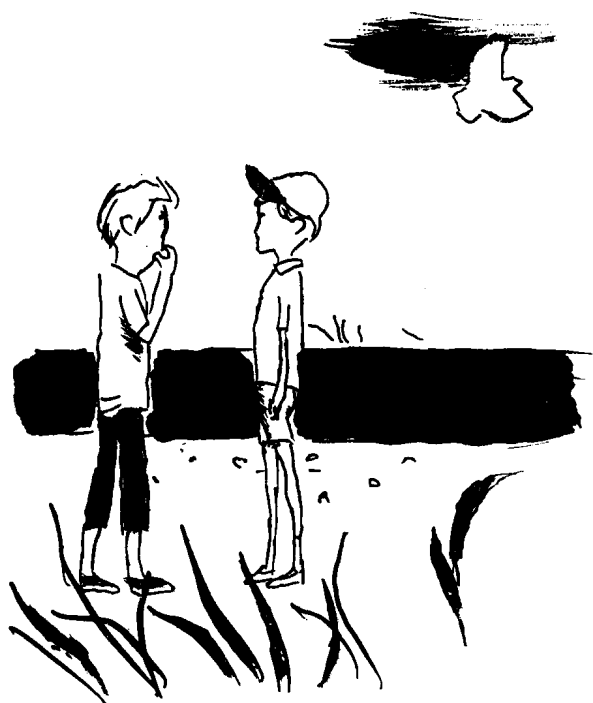
ある日、アキラは、ケンのいる飯場^{はんば}へもあそびにいった。

飯場^{はんば}というのは、大きな工事をする時に、やとわれて、よその土地からやってきてはたらく人たちが、工事がすむまでいっしょにとまっている家だ。プレハブの建て物^たで、おおぜいの男の人たちがいるが、みんな遠いなかから、ひとりではたらきに出てきている。

その中で、ケンのうちだけは、両親^{りやうしん}とケンの三人ぐらして、おとうさんは工事場ではたらいて、おかあさんは、飯場^{はんば}にいる人らの食事^じをつくったり、そうじ、せんたくなどの仕事をまい日している。

飯場の横^{よこ}のあき地で、アキラとケンがメンコをしていると、

「ぼうや、これおあがり。」



と、いつて、ケンのおかあさんが、ふかしたイモを皿さらにのせても
ってきた。

つんである木材もくざいの上に、アキラとケンがならんでこしをおろして、
そのイモを食べはじめると、そばでケンのおかあさんは、大きなタ
ライにいっぱい入れた、作業服さぎょうふくのよごれたのを、せっせと、せんた
く機きへうつしながら、

「こげしてどろんこになって、いなか者らが町にトンネルを作りよ
る。そして、村では米や麦むぎを作りよる。」

と、つぶやいている。

おくの方のへやの中から、どこかのいなかの民謡みんようがきこえてくる。
今日は仕事の交代こうたいで休みの人らが二、三人でうたったり、ふるさと
の家への手紙を書いたりしているらしい。